

文理連接研究会 2022 年第 2 回 (2022/5/27)

「エコロジー」をどのように論じることができるのか(2)

・ミシェル・セールの『自然契約』と『作家、学者、哲学者は世界を旅する』をめぐって

・エコロジーを論じるにあたって、自然をめぐるセールの二つの書籍『自然契約』(1990)および『作家、学者、哲学者は世界を旅する』(2015)から、自然の捉え方を検討する。

【1】 ミシェル・セール『自然契約』 / Michel Serres, *Le Contrat Naturel*, 1990



ゴヤ「棍棒での決闘」

・「二人の敵対者が、棍棒を振り回し、ずるずる崩れ落ちる砂地のど真ん中で争っている。相手の先方に神経を尖らせ、打たれば打ち返し、身をかわされてもすかさず二の太刀を浴びせ流。各斑の外でこの一幅の情景を眺めているわれわれ見物人

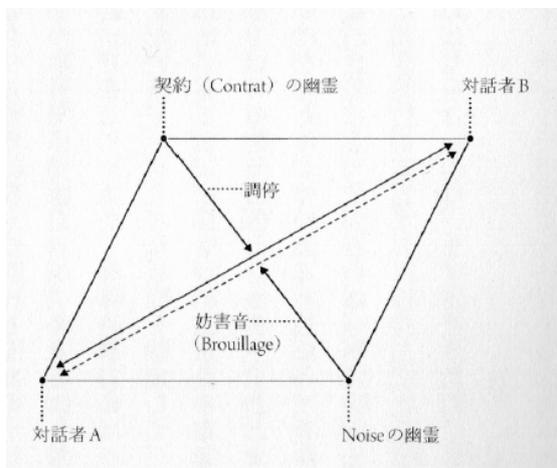
は、この二人の敵対者の対象的な動作を時間の流れに沿って見つめている。なんとすばらしい—だがありふれた—見世物だろう。

ところでこの画家—それはゴヤなのだが—は、この二人の決闘者を膝まで泥砂に使った姿で描いている。一方語句ごとに粘りつくように二人は穴に引き摺り込まれ、そのうちに二人ともすっかり飲み込まれてしまうだろう。その店舗はどうだろうか。それは二人の攻撃意欲次第である。戦いが白熱し、攻撃が激しく非常になればなるほど、彼らの埋没の速度も早くなる。二人の決闘者は自分が淵に落ち込んでいるとは夢にも思っていない。それに対して、外側にいるわれわれにはそれがはっきり見て取れる。」(13-14)

セールは、観客（もしくは絵を見ている私たち）はこの二人の闘争に熱狂しているのだが、対立する二者は写鏡であり、表裏一体の関係を成しているとしている。私たちはこの表裏一体となっている闘争する二者にばかり注目してきたのだが、セールはこの絵画の背景、闘争者の足元に渦巻く泥、決闘者たちを飲み込もうとしている流砂を見よ、という。

二者間の対立が成立している、ということはこの二人が共通言語を話す、という契約が成立しているからであり、そのような協働関係が成り立っているからこそである、とセールはしている。

・闘争状態が成立するためには、別の隠された二つのファクター（「幽霊」）が働いていることをセールは指摘している。一つは、「契約の幽霊」である。闘争とはセールによれば、法的な契約状態である。闘争する二者の間が共通言語である「コード」を共有し合意していなければ成り立たない。つまり、二者間の闘争は「コード」という「契約の幽霊」によって見守られている。セールは、この契約に関わるものを「主体的暴力」とする。一方、この



図は清水高志『ミシェル・セール』(2013)p.103より引用

の成立した闘争の緊張関係のもう一方には、「Noiseの幽霊」がいるとされる。これは、人間間で行われる闘争それ自体を覆い隠してしまいかねないノイズ=自然に関するものである。つまり、この闘争を揺るがしかねない、人間間の争いそのものを飲み込んでしまう可能性がある自然の妨害から「Noiseの幽霊」によって守られてはじめて、闘争が成立することをセールは示唆している。つまり、人間間の争いにおいては、「Noiseの幽霊」によって、自然が常に排除されていることによって、安定性を保つことができる。セールは、この

「Noiseの幽霊」との間にあるものを「客体的暴力」と呼ぶ。法的な契約関係のもとに行使される「主体的な暴力」とは異なり、この「客体的な暴力」には「いかなる法も存在せず、制限も規則も存在しない」。つまり、自然は闘争に対して法を無視して牙をむく。そして、人間の方もこの契約的な闘争によって、自然に対してどのような損害を与えようとも、その暴力には法がない。

・セールのこの指摘は、環境をめぐる議論がともすると、「人間」と「自然」という単純な二項対立的なものへと陥ることに対し、一つの警鐘を鳴らす。つまり、自然（「Noise」）の反対側には、人間集団（「契約」）があり、その二項との緊張関係を保った二者の闘争という四辺形をなす緊張関係がある。自然に対して人間が加える野放図の暴力、あるいは自然に対する人間の関係を考える際には、このような人間側の契約と闘争の緊張関係を取り落として「人間」と「自然」を考えることはできないことをセールは示唆している（そして、この指摘は現在においても、かなりの部分において、有効であると考えられる）。

・人間間の闘争が人間そのものを滅ぼしかねないという危機感のもとに「社会契約」が生まれたように、セールは、この自然ともまた、「契約」を結ぶべきである、と指摘する。つまり、今や渦巻く泥がゴヤの絵における二人の決闘者を飲み込もうとするように、私たちは自分たちが自然に与えてきた法外な暴力の結果として、足元の大地に飲み込まれようとしているからである。

「この原始的状態とは遠く異なった条件下で、しかもそれと平行に、われわれは、集団的死の脅威に晒されながら、客観的暴力に対して新たな方を編み出さなければならないが、

それはちょうど、想像もつかないほどに遠い祖先たちが、最も古い方を編み出し、彼らの主観的暴力を、契約によって、戦争と呼ばれるものと同じことである。新しい条約、新しい先行協定を、人間世界の客観的な敵、すなわち、あるがままの世界〔自然〕に対して結ばなければならない。万物に対する万人の戦い。(32-33, □ は引用者)

・セールは『パラジット』において、最も根源的かつ単純な関係を「寄生」としている。「寄生行為は単一方向へ向かい、流れは逆の方向に向かうことなく、もっぱら寄生者の利益に向かって流れる。帰省者はこの一方通行によって全てを取り、そして何も返さない」というこの寄生の関係は人間が自然に対して行使してきた関係そのものである。ルソーが『社会契約論』で批判しているのは、まさにこのような関係を不法で不当な関係(「私はお前との間に、負担はまったくおまえにかかり、利益はまったく私のものとなるような、約束を結ぼう」¹)として批判している。これに対して、ルソーは権利と義務、負担と恩恵が相互に平等な関係を結ぼうとするのである。「われわれを社会全体に結びつけている約束は、この約束が相互的であるが故にのみ、拘束的なのである。(中略) すなわち、社会契約は、市民の間に平等を確立し、そこで、市民は全て同じ条件で約束し合い、また全て同じ権利を享受することになる。」²

・セールは、このような「寄生」の関係の契約はやがて寄食者をも含めた宿主の死につながるとして、自然との「契約」、それも、社会的要素だけではない、自然との「共生」と「相互性」からなる自然契約の締結を求める。そして、「共生」とは「互惠性」によって定義されるのだが、「自然が人間に与えるように、人間は自然に返さねばならない」とし、セールは次のように問う。「例えば、われわれは科学の諸対象から知識を取り出しているが、それらの対象物にわれわれは何を返すのだろうか」。「われわれはかつて自分たちがしたように、もはや科学的な意味で知識を漁ることもなくなるだろう(中略) 集团的死がこの地球規模の契約に目を光らせているからだ」(65)。

・とはいえ、セールはこのようにして自然と人間との間での契約締結が喫緊の必要性を帯びていることをいうのであるが、その一方で、これまでの文明がこれほどまでに恐れ、それ故支配をあの手この手で試みてきたほどに、この「自然」の全貌というものが容易に掴みきれものではないことを指摘する。そして、「人間」の方もそうであるとする。セールは、1980年代の著作『パラジット』(1980)、『ローマ』(1983)、『五感』(1985)などで繰り返し、私たちが人間全体の集団として「われわれ」をどのように考えたら良いのか、まだ知らない、ということを繰り返し指摘している。ホップズは社会契約によって、人間集団はリヴァイアサンという巨大生物を形作るとしたのだが、その時代においてはこの怪物は「惑星の物理的システムのバランスシートによっては取るに足らないものでありえ」、「物理的には無に等しかった」。しかし、今日の人間は、「極めて図体が大きくなったので、ついに物理的に存在するに至った」(29)とセールは指摘する。単独の個人が契約を結ぶことでリヴァイアサンにな

¹ ルソー『社会契約論 または政治的権利の諸原理』作田啓一訳(白水社, 1986) p.119.

² ルソー, *op.cit.*, pp.137-139.

ったわけだが、巨大な都市を建設し、あらゆる場所をアスファルトで覆いながら、「私は個人として思考し、われわれは集団という動物として生きていたが、今やわれわれの集合体は大洋を形成する」テクトニクスプレートとなっている、とセールは述べる。つまり、「自然契約」について考え、「自然」を私たちの契約関係に引き込まざるを得なくなった現状について考えるときには、この契約のもう一人の当事者である私たち「人間」もまた、変化していることを考えることを抜きにすることはできない。

・清水は、自然と人間とがいずれも捉えきれない「多」であるとするなら、両者は鏡像関係として捉えられるのではないかと指摘している。「お互いに似ているということを解して、初めて人間は自然の姿を目にすることができる」³のではないかと。だとすれば、「自然契約」はその契約の必要性を惹起する闘争状態のもとに、契約主体であるところの「自然」と「人間」を捉え直すところから始めなくてはならないことになる。

・こうしたセールの議論は、自然に対する人間の関わりとして単純化されがちな環境問題を考える際に、私たちが「私たち」について考えることを棄却してはならないことを示唆する。一方で、あくまでも、この契約は寄食者たる人間が宿主である自然を殺さないためのものであるし、自然はあくまで、とらえがたくも私たち人間との契約を結ぶべき対象物として現れる関係で、極めて西洋的な自然観の中から生まれてきたものという側面を持っている。

【2】 ミシェル・セール『作家、学者、哲学者は世界を旅する』／Michel Serres, *Écrivains, savants et philosophes font le tour du monde*, 2015

・フィリップ・デスコラ『自然と文化を越えて』（2005）

社会における人間と非人間の四分類

ナチュラリズム：内面的（魂）差異と肉体的同一性

アニミズム：内面的（魂）同一性と肉体的差異

トーテミズム：内面的同一性と肉体的同一性（同一性は前提されるもの）

アナロジズム：内面的差異と肉体的差異（差異の中にアナロジーとしての同一性が発見される）

・『作家、学者、哲学者は世界を旅する』（～以下『作家』）はデスコラの『自然と文化を越えて』における人間と非人間の四分類を前提に執筆された。デスコラにおいて重要であったのは、それまで文化人類学においては、超越的な視点として透明化されてきた西洋文明（「自然と文化」）をも含めて、文化人類学的視点から、人間と環境の間の連続性あるいは非連続性の配分を明らかにすることであった。その意味において、デスコラは、ラトゥール、カステロ、ストラザーンとともに、人類学における「存在論的転回」の重要人物である。

・これに対し、セールが『作家』で行っているのは、この四分類を西欧文明に並存しているものとして読み込むことである。いわば、セールは、一つ一つの文化を大別して分類するた

³ 清水高志『ミシェル・セール』（白水社, 2013), p.113.

めというよりは、一つの文化の中にいつの間にか取り込まれた異質なものと折り畳まれた複数の時間性を開き、その複雑な絡まりをとくための鍵としてむしろこの四分類を文化に読み込もうとする。

- ・ラ・フォンテーヌの寓話は「ロバと犬」が愚かなものと穏和なものを寓意するように、トーテミズム的魂の同一性のもとに、社会集団や階級の特徴を整理する。

- ・また、同じくラ・フォンテーヌの「狼と犬」においては、家畜化された犬と野生の狼との対立がトーテミズム的に語られつつも、犬と狼だけではなく、人間をもそれらに連続した存在、魂としては同一のあり方をしているとされていることによって、アニミズム的な側面を持っていることが指摘される。

- ・アナログ主义的な視点は、肉体や魂をそれぞれバラバラなものとして捉えていて、それらにあらかじめの同一性を見なしていない世界観にある。これに対して、トーテミズムはあらかじめ、どの魂とどの身体が同一であるのかが前提とされている。アナログ主义的な視点は、そのようなバラバラの世界において、アナロジーの操作を行うことで同一性を見出そうとする（つまり世界観としてはバラバラなままである）。このようなアナログ主义的視点の代表者としてセールが挙げるのがライブニッツである。神のもとでの予定調和の発見、という名義のもとで、ライブニッツは、アナログリストとして離散的な諸物の間に関係を見出し、自身のエンサイクロペディアを作り続けた、とセールは述べている。

- ・そして、もちろんヨーロッパは「自然と文化（人間）」を二分するナチュラルリストである。

- ・セールのこのような分析は、デスコラの四分類を手がかりに、一つの文化の中にポリフォニックに、そして多時間的に自然と人間を捉える視点が共在していることを明らかにしようとしている。

- ・「エコロジー」について考えるとき、私たちは、セールが二つの本で行ったこの二つの作業をおそらく同時並行して行う必要があるのではないか。つまり、一つは私たちがあまりにもどっぷりと浸かっている「自然」と「人間」の二分法において、しかしながら人間の緊張に満ちた契約関係の社会を考慮しつつ、そこに契約主体として自然を引き入れる形で「自然契約」を結ぶことである。そしてもう一つは、そうしておきながら、「自然」と「人間」の関係について、二分法でのみ捉えずに多視点的な読み取りを試みることである。